慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	木村素衛の教育思想における形成と歴史： 形成概念の歴史性に着目して
Sub Title	The concept of "the formation" in Motomori Kimura's educational thought : focusing on his concern with the historical philosophy
Author	山田, 真由美(Yamada, Mayumi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2016
Jtitle	哲學 No.136 (2016. 3) ,p.99- 124
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this paper is to re-consider the conception of "the formation" in Motomori Kimura's thought, and to figure out the relationship between his philosophy for the love of representation, called "Hyogen-ai", and the thought about the national education created in the war time. In the current study, these two aspects of Kimura's thought have been regarded as in conflict because his thought of the national education seems to have a strong link with the responsibility of encouraging the war in 1940s. Against these situations, this paper focuses on Kimura's concern with the issue about the historical situation, and to point out that the most important conception "formation" always means the creativity of subjective individuals which form the culture and history. Therefore, in his thought, education must be the process of forming a man to the autonomous subject and also the process of creating the culture, history, nation and the whole world historically. This idea toward historical philosophy seems to be common to the thought of philosophers belong to the Kyoto-school.
Notes	特集：教育学 寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000136-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese

Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

木村素衛の教育思想における形成と歴史

――形成概念の歴史性に着目して――

山　田　　真由美*

The Concept of "the Formation" in Motomori Kimura's Educational Thought: Focusing on his Concern with the Historical Philosophy

Mayumi Yamada

The purpose of this paper is to re-consider the conception of "the formation" in Motomori Kimura's thought, and to figure out the relationship between his philosophy for the love of representation, called "*Hyogen-ai*", and the thought about the national education created in the war time. In the current study, these two aspects of Kimura's thought have been regarded as in conflict because his thought of the national education seems to have a strong link with the responsibility of encouraging the war in 1940s. Against these situations, this paper focuses on Kimura's concern with the issue about the historical situation, and to point out that the most important conception "formation" always means the creativity of subjective individuals which form the culture and history. Therefore, in his thought, education must be the process of forming a man to the autonomous subject and also the process of creating the culture, history, nation and the whole world historically. This idea toward historical philosophy seems to be common to the thought of philosophers belong to the Kyoto-school.

* 慶應義塾大学大学院　社会学研究科教育学専攻

1　問題の所在

1.1　これまでの木村研究の動向

本稿は，京都学派の哲学者・木村素衛（1895–1946）の思索における「形成」概念について，その歴史形成としての性格に着目してとらえ直すことで，彼の教育思想の特色と問題を歴史哲学の視点より再検討しようとするものである．これまで木村の思索活動は，主として『表現愛』（1939年）に展開する「表現愛の哲学」と，大戦下に執筆された『国家に於ける文化と教育』（1946年）に展開する「国民教育論」の二方向に分けて論じられることが一般的であった．本稿は，木村の教育思想における歴史哲学への関心を明らかにすることで，表現愛の哲学に対する国民教育論の位置づけを再考し，同二論を連続的にとらえる可能性を提起する．それによって，木村の思索を1930年代の京都学派が展開した歴史哲学の問題圏に位置づける可能性を示唆するとともに，現在「超越性」の観点より再評価が進められる「京都学派教育学」に対し，民族や国家に関する議論を含めた「歴史」への視座を提起したい．

教育学の領域で木村の思索が注目され始めるのは，比較的近年のことである．その端緒といえるのは，木村の教育思想に「教育学の立ち上げ方のオルターナティヴ」を認めようとした大西正倫の論であろう[1)]．大西によれば，木村の教育思想は，従来の「教育に関する捉え方・枠組み，語彙・語法から隔たりすぎ」た「ひどく異質」なものであり，木村はまさに戦後の教育学界にとっての「エイリアン」というべき思想家として注目される．大西が提示した「オルターナティヴ」としての木村像を契機に，教育学は木村の思索が有する「超越性」への視座を高く評価し，以後，木村の教育思想は教育の語り方についての新たな展開可能性として積極的に言及されるようになる[2)]．そこで着目されるのは主として彼の表現愛に関する思索であり，これまでの再評価では，美や超越の問題を論じる彼の議論の「豊かさ」を，いかに現実の教育現場に継承し展開するかというところに

論の主眼がおかれてきた[3)].

こうした再評価の動向を批判的にとらえ，木村が大戦中に展開した国民教育論をあらためて吟味する必要を提起したものに，森田伸子の論考がある[4)]．木村の身体論に着目する森田は，これまでの木村研究において，それが「国家の問題とは無関係なものとして，もっぱら美学的な，あるいは現象学的な身体論の側面だけが強調されていること」を指摘し，身体論の側面から国民教育論の再構成を試みる[5)]．具体的には，木村が「身体」の問題を射程とした1932年の論文「意志と行為」から『国家に於ける文化と教育』にまで連続する「個と全体」という問題を，特に田辺哲学との関連において再構成することで，表現愛の哲学が，実はその構想段階より「国家」の問題にいたる萌芽を有していた旨を明らかにした．しかし森田の議論では，木村の思索における歴史的時間への深化がとらえられていないため，その検討はいまだ現象学的なる身体論の側面にとまり，なぜ木村が個と全体の問題を具体的に「国家」の問題として，さらには教育を「国民」教育の問題として語らざるを得なかったのか，その必然的な連関はいまだ明らかではない．表現愛から国民教育論にいたる思想形成の過程に必然なる連続性を見いだすためには，『表現愛』以来の木村における歴史哲学への関心に着目しなければならない．手掛かりとなるのは，特に1930年代に歴史哲学を主題とした京都学派との思想的連関についてである．

木村が京都学派の哲学者としてその思索を展開したことは，先行研究において同様に認められるところである．日本の教育学と「京都学派人間学」の関連を指摘する矢野智司の研究や[6)]，「京都学派教育学」の立ち上げを試みる田中毎実が論じるように[7)]，西田幾多郎を起点とする「〈無〉の思想」の継承を以て「京都学派」を定義するならば，木村は間違いなくそのひとりに数えられるが[8)]，しかし京都学派のうちに「世界史の哲学」派と呼ばれる一連の哲学者を含めようとする場合，それと木村との思想的連関については総じて消極的な評価に転換する[9)]．つまり木村素衛は，こ

れまで美学的あるいは現象学的な側面において京都学派の哲学者として評価されながら，国家や民族の問題を論じた歴史哲学的な側面に関しては，その京都学派としての位置づけをいまだ留保されるのである[10]．

そこで本稿が試みるのは，1939 年に刊行された『表現愛』の読みなおし，具体的には同書に論じられた「形成」概念における歴史形成的性格の闡明である．1931 年の論文「一打の鑿」以来，木村の主たる関心が内と外の相即としての「表現＝形成」の問題に据えられたことはこれまでも指摘されてきたが，しかしながら同概念が「伝統と創造」の弁証法的転換点という歴史性を以て理論化されたことについては，これまでほとんど着目されていない．『表現愛』初版の「序」にて木村が自ら述べるように，同書の第一論文「身体と精神」にて形成的表現の問題は「伝統と創造」の問題として，歴史的時間的な深化を獲得し，形成は過去と未来の自覚的媒介点として理論化される[11]．同書に展開する「形成」概念を歴史性より再検討することで，当時の木村が歴史哲学への関心を有したことを示唆し得るとともに，『表現愛』から「国民教育論」にいたる思索展開の過程を連続的にとらえることが可能であると思われる．そのことは，同時期に歴史哲学を論じた京都学派と木村の関連を示唆するとともに，戦中に木村が展開した国民教育論を，かえって京都学派の思想に位置づけるための布石になると考える．

1.2　京都学派における教育学と歴史哲学

京都学派における教育学と歴史哲学との接点について特筆すべきは，教育学の基礎を歴史哲学におく必要を主張した西田幾多郎の論考「教育学について」（1933 年）である．同論にて教育学がいかに成立するかを論じた西田は，人間が本質的に「歴史的社会的存在」であることを強調し，ゆえに，従来心理学や倫理学に求められてきた教育学の基礎が「歴史哲学」におかれるのでなければならないことを主張する[12]．彼によれば，歴史的

現実に生きる人間はすべて「社会的・歴史的世界の要素」にほかならず，その意味で教育は「歴史的イデー」による「具体的な歴史人」の形成をその目的とすべきであるという．ここに西田によって教育学と歴史哲学との重大な連関が提案されるが，はたして木村の教育思想には，同様のとらえ方が継承・展開されたのだろうか．着目すべきは，木村の場合も西田と同様に，教育の本質が「天地の化育を賛ける業」として規定されることである．人間存在が「社会的・歴史的世界の要素」であることを強調する西田は，教育を「歴史を作る人間を作る」意味での「形成作用」ととらえ，ゆえに「賛天地之化育」を提起したと考えられるが，木村が同様の意味を以て教育の本質を論じたとすれば，彼の教育思想においてもやはり歴史哲学が重要な意味をもつと考えられる．

しかしながら先に述べたように，やはり木村の思想展開における歴史の問題は，現在までさほど重視されていない．たとえば大西正倫の場合をみてみよう．大西は木村の思索において，教育が「歴史的形成作用」の意味を有することをたしかに指摘するが，しかし彼は，木村の教育思想それ自体を「個的主体の行為としての〈形成＝表現〉」と「歴史的形成作用」という「二つの文脈」として理解しなければならないことを強調し，前者を「表現愛の立場」が確立された「メインとなる方向」，後者を「教育論“以前”にとどまる」「超越的な方向」として論じ分ける必要を提起する[13]．その「論じ分け」を前提するこうした議論では，表現愛の哲学それ自体における歴史の問題は当然問われることがなく，そのため木村の議論において「形成＝表現」が本質的に歴史形成の意味をもつと考える本稿の立場はある意味異質であるのかもしれない[14]．しかしこうした「表現愛」の論じ方が，現に木村の思索における教育学と歴史哲学を切り分ける視点を自明のものとし，そのことが「表現愛の哲学」を「超越性」への「オルターナティヴ」，「国民教育論」を「世界史の哲学」派に類する「戦争協力」として切り分ける現在の再評価の土台になっていることは明らかであり，こ

うした先入見は，木村の教育思想における歴史哲学の位置づけを見失わせるとともに，西田がその教育論において最も強調したはずの「歴史」に対する視座を看過してしまう危険がある．「個的主体の行為としての形成」と「歴史の形成」がいかなる関連を有するかを明らかにするためには，『表現愛』に展開される形成概念の歴史性を明らかにし，そのうえで，国民教育論にいたる彼の具体的な教育思想を検討しなければならない．

以上の関心から，本稿は次の二点を具体的な検討課題に設定する．第一に，木村の『表現愛』における「形成」概念を検討し，それがいかに同時に歴史形成の意味として語られるかを明らかにする．そして第二に，『国家に於ける文化と教育』を手掛かりに同形成概念の教育学的展開をたどり，木村が教育を論じる際に，歴史的現実との対峙を不可欠としたことを明らかにする．これらの検討を通して，木村の教育思想における「歴史哲学」の位置づけを再考し，表現愛の哲学と国民教育論を連続的にとらえる見方を提起するとともに，彼の教育思想を，同時期の京都学派の問題圏に位置づける可能性を示唆することを，本稿の目的としたい．

2 『表現愛』における歴史の問題

2.1 形成的表現とはなにか

本章での問題は，木村の『表現愛』において主体の「表現＝形成」がいかに歴史形成の問題として語られるかということにある．同書は二つの論文において展開されるが，本稿では彼の形成概念を吟味するため，主としてその第一論文「身体と精神」を手掛かりとする[15]．前章で述べたように，木村は同論に関して歴史哲学への関心を自ら表明しており，そこでは「一打の鑿」以来の内と外の相即の論理が，あらためて伝統と創造の問題として語り直されるからである．議論の前提として，まずは同論における「表現」と「形成」それぞれの概念の意味を確認しておきたい．

彼によれば，表現とは自然に対する精神の実現として，内なる自己を外

において現わすことにほかならない．内とは主体の表現的意志であり，表現の本質的性格は，外なる自然における主体の意志の実現として，内と外の相即性，主観と客観の相即性に見いだされる．内と外の相即ということは，内なる自己を外に押しだし，外において内を顕現させることにほかならず，そのことは何らかの意味において外を作り変えることを意味するのでなければならない．そのため表現は必然的に身体における制作性を媒介しなければならず，その意味で主体の表現はすなわち「形成」としてのみ語り得る．表現は同時に制作として形成であり，木村によれば人間はすべて形成の主体として，外との弁証法的相即において自己を形成的に表現することにより存在する．つまり木村の議論において，形成とは個的主体にとってその存在の契機であり本質である．

それでは形成における外とは何を意味するか．外が内との相即により現わされるものであるならば，第一にそれは表現的意志と切り離すことのできないものとして，形成の素材であるにほかならない．素材とは，内なる形相を実現しようとする表現的自己に対して障碍として働くものである．外が障碍性をもつということは，内はそれと対峙するところに形成の契機を獲得するのであり，木村によれば，形成とはその意味で主体が素材の否定性を克服し，却ってそれを破り去るところに初めて実現するのでなければならない．外なる素材は「単に主体からの形成的加工を待つに止まるものではなく」，「みずから我々の表現的意志に語りかけて来る表現的環境」でなければならず，「主体は語りかける外に対して応うる内として，初めて本来的意味に於ける表現的主体性を獲得する」[16]．すなわち彼のいう形成とは，すなわち「内なる形相を，表現的主体に於て見られているイデアを，外を克服すること依って実現すること」にほかならず[17]，その意味で内と外は常に否定を媒介しながら相即し，主体と環境のかかる連関において，表現的世界は成立するのである．

上の論理に加えて本稿が着目するのは，木村が外なるものの本質をその

伝統性において認めようとする点である．彼によれば，外が主体に語りかけ主体がそれに応えるという形成の連関には，単に主体と環境の同時並存という空間的な対立のみではなく，すでに見られた環境をさらに限定し返すという時間的な対立関係が認められなければならない．自らに語りかける外を形成的に限定し返すところに形成的主体の本質があるとすれば，表現的環境は，主体に対しすでに与えられたものとして過去的な性質を有するものであるとともに，それは主体の形成を媒介に自らを語り伝え，語り渡すものとして，伝統的なる性質をもつものでなければならない．いわく「表現的環境はその本質に於て言葉通りに伝統的（traditionell）なものであり，その既にの性格の故に過去的なものであると云わなければならない」[18]．すなわち表現的外とは単に素材ではない，伝統性において成立する「歴史的環境」にほかならず，彼によれば「主体はかかるものを媒介としての他，主体として働くことはできないのである」[19]．冒頭で触れたように，ここに木村が形成的表現における歴史的時間をとらえたその出発点が確認できる．

2.2　形成における伝統と創造

さて形成的表現における外が過去的性格をもつとすれば，それとの相互否定においてイデアを見る内は，未だ見えざるものへの憧憬として，未来的性格をもつものでなければならない．主体は形成においてイデアを見るが，木村によれば「それが尚内に見られている限り，それは外に於て実現せられ現実的となるべきものが，尚其処迄は未だ来ていないと云う在り方に於て，主体とつながっているのでなければならない」[20]．ここに内なるイデアの未来性が成立する．イデアの本質がその未来性にあるとしても，それが主観の単なる観念的空想に留まるものでないことは，あらためて言うまでもないだろう．というのも，イデアが形成において見られるということは，表現的環境との相互否定を媒介したその顕現であるにほかなら

ず，そのことは単に精神的にではなく，身体的にイデアを見ることでなければならない．つまりイデアは未だ来たらざるものでありながら，外なる歴史的環境との相即においてその実在性を獲得する．その意味で「時間はイデアに取って偶然的，非本質的なものであるのではなく，却て時間性を欠いてはイデアはその本質的意味を喪失しなければならない」[21]．木村によれば，イデアは「主体の単なる自発性から生まれるもの」ではない「表現的世界に於ける一つの実在」でなければならず，このことは「表現的生命の既限定面である作られたものとしての外がこの自発的自己限定の媒介契機となると云う連関に負っている」[22]．とすれば主体がイデアを見るということは形成において内が外を媒介することとして，具体的には主体が伝統よりの呼びかけに応えそれを克服する創造であるにほかならず，その意味で形成は，伝統と創造の主体における媒介点として理論化される．イデアは伝統を媒介し創造する主体の形成的表現において，歴史的時間における実在性を獲得する．すなわち木村が「形成」というとき，それはすべて「歴史的時間の現在」における自覚点として，その射程は，「伝統と創造とがかくの如く否定的に媒介される云わば場所，過去と未来とがそこに於て出会しそこに於て弁証法的に相即するところ」であるにほかならないのである[23]．

その意味で主体はイデアを形成的に実現する形成的主体として，伝統と創造の媒介点なる歴史的現在を自覚し，歴史の創造的尖端を担うものとして理論化される．木村の理論では，形成する主体は「伝統を媒介する創造的意志の現実的自覚点として，最初からして歴史的社会的全体からその具体的意味が基礎づけられて来る個性的存在であるのでなければなら」ず，とすれば主体の「形成」は常に同時に「歴史形成」としての意味をもつのでなければならない[24]．彼の『表現愛』において，外なる環境と内なるイデアはその具体的実在性を歴史的時間に獲得するのであり，その意味で木村のいう形成は，個的主体の問題として内と外の相即でありながら，常

に同時に歴史的現在の自覚点として歴史形成でなければならないということができる．個的主体たる人間は，伝統と創造の弁証法的相即において成立する表現的存在の形成的自覚点として，歴史の形成に参与するのであり，形成することにおいて歴史の世界を生きるのである．

そのため木村のいう主体が，個々に独立した存在として主体であるのではなく，環境との相互限定により動的に規定される存在であることはいうまでもないだろう．外の過去性に対して内が未来的契機を負うとしても，その媒介点を「形成」とする彼の理論では，人間と歴史は常に相限定的な相即関係において在るのでなければならない．つまり木村は個的主体について，それが歴史的実在の内に在りながら，その自覚的契機として働くものであるという．彼によれば，人間とは「表現的存在，歴史的実在，の内に在って，そのおのずから歴史的自然的に成って行く動きの内側からこれを自ら自覚的に成して行くものに他ならず，そこに個的人間存在の本質的意味がありその使命があるのである」[25]．

2.3　形成と歴史形成

さて，ここに個的主体の行為としての「形成」がいかなる意味で歴史の形成であるかという当初の問題が明らかになるとともに，人間存在を「社会的・歴史的世界の要素」とした西田の論考「教育学について」との接点を確認することができるだろう．これまで明らかにしたように，西田の場合と同様，木村においても個的主体は形成において歴史的使命を実現する歴史的な存在として理論化される．木村の議論では，すべて人間は自己に呼びかける伝統に応答し，そこに創造的契機を見いだす表現的主体として，歴史的実在の形成的自覚点でなければならなかった．とすれば個的主体の歴史的使命とは，伝統と創造の弁証法的媒介点として働くことにほかならず，歴史的なる文化世界を形成することに見いだされる．その意味で文化とは「歴史的自然に於ける人間の agricultura」にほかならず，木村

によれば，文化の本質は「内と外とを相互に表現的な契機としてみずからを自己形成的に動かして行く歴史的自然の内に在ってその営みを人間的主体が自覚的に育て成して行くことに在るのでなければならない」[26]．

主体がすなわち「形成」において文化世界を形成する主体であるとすれば，人間を形成的主体にまで育成する意味での教育が，同時に歴史形成の役割を強調されることも容易に予測し得るであろう．つまり木村の思索において，個的主体の行為としての「形成」は，常に同時に「歴史的形成作用」としてなされるのでなければならず，ゆえに主体形成を論じる彼の教育思想においても，それは常に同時に歴史形成の問題でなければならないのである．ここに，日本歴史の運命を自らの哲学の課題とし，歴史的現実と対峙するなかで国家と国民の問題を論ぜざるを得なかった，国民教育論への必然たる萌芽が確認できる．教育が「天地の化育を賛ける業」であるというとき，天地の化育とはまさに歴史における日本の運命であり，それを担うのは個的主体の行為としての「形成」であるほかない．形成主体としての人間が歴史的実在の自覚点であるという彼の思索を前提にしたとき，木村が教育の本質を語った次の文も，より闡明に理解されよう．

> 文化が歴史的実在の自覚的契機として主体によって創造されるとすれば，かかる主体そのものを育成するのが教育の本務でなければならない．だから教育は文化をその底から育成し，歴史をその底から形成するものといはれなければならない．天地の化育を賛ける者それ自身を育成することによって天地の化育を賛ける業，それが教育の本質なのである．[27]

以上の視点に立ったうえで，本稿の次なる課題は，彼の教育論が具体的にどのように展開するかを明らかにすることにある．ここまで木村の「形成」概念が，本質的に歴史形成としての意味をもつこと，ゆえに教育の本質が「天地の化育を賛ける業」として論じられることを確認したが，それ

は具体的な教育論としてどのように展開するのか．以下，表現愛の哲学から国民教育論にいたる教育思想が体系的にまとめられた著書『国家に於ける文化と教育』（1946 年）を手掛かりに，木村の教育思想の再構成を試みる．

3 『国家に於ける文化と教育』における歴史の問題

3.1 自覚的形成としての陶冶性

教育論について第一に着目するのは，木村が教育を，人間存在にとっての本質的な営みとして理解する点である．教育とはその最も広義においては，教え教えられ，導き導かれるという関係において成立する．木村は教育をパイースとパイダゴゥゴスの関係として論じるが，彼によれば，人間が本来的に歴史的社会的関係の内に生きる存在である限り，我々の日常生活はすべて教育的交渉を離れては成立し得ないのであり，「歴史的＝社会的な全領域が常に教育活動的であるといわなければならない」[28]．しかし人間が常に関係の内に在るとしても，それが導き導かれるという教育的関係として成立するのでなければならない必然性はどこに見いだされるのか．木村が論じるのは，人間存在の本質としての陶冶性についてである．

前章にみたように，木村の理論では，人間はすべて内なるイデアを外に形成し出だすことにおいて存在する形成的主体でなければならなかった．外に対する内が表現的意志といわれたように，生命は本来意志的な存在として自らの発展と充実を内から根源的に要求するのでなければならない．フィヒテの思想に即して語られるように，木村によれば，有限な人間は絶対に到達することのできない「完全性 Vollkommenheit」を究極の目標として，それに向かって無限に努力するところに真の使命を有するものであるという [29]．前節までの議論にみたように，目指すべき「完全性」とは形成的イデアにほかならないが，形成においてイデアを見ようとする努力が自覚的になされるところに，木村は人間存在における教育可能性として

の陶冶性を認めようとする[30]．

表現愛の立場にみたように，主体は形成的にイデアを見るが，内なるイデアとは畢竟未来であり，人間は本来イデアに対して憧憬し努力する存在でなければならなかった．人間の「イデアに対する衝動は自覚的となったとき努力となる」のであり，「努力はイデアを現実に見ようとする意志の興起」として，すなわち「形成への意志」であるにほかならない[31]．つまり主体が本来イデアに対して形成的努力的であることを認める木村は，それを見るための無限なる「形成」の過程をこそ人間存在の陶冶可能性として論じ，それが自覚的に行われるところに教育可能性としての陶冶性を認めるのである．

> 人間はそれぞれこのように努力的向上的であることを本来の性格とするということ，――恰もここに我々は人間の陶冶可能性と，それと共に従ってまた教え導くことの可能性を見るのである．何故なら人間が本来的にかくの如く高きものに対して渇仰的であるということは，人間がみずからの生命の一層高き形成に対して要求をもつということ，而も自覚的存在としての人間はみずからこの本質的要求を自覚している存在であるということにほかならず，このことは，明白であるように，人間が形成への可能性即ち陶冶性をもつということにほかならないからである．[32]

こうして教育可能性は，イデアを見んがために「形成」へと努力する人間の陶冶性に基礎づけられた．イデアを内在即超越的とする木村の理論では，イデアへの努力はすなわち形成であるにほかならない．しかし自覚的な陶冶性において教育が人間に本質的営みであるとしても，それは畢竟環境との交渉における自己教育であるに過ぎず，先にも述べたように，教育という場合導くものと導かれるものという二者の教育的関係が成立するはずである．それでは上の意味での教育は，いったいどのように理論化され

るのか.

3.2　自己形成への助力としての教育

人間の教育可能性を，形成への自覚的努力という主体の本質的性格に認めたことを木村教育論の第一の特徴とするならば，第二の特徴は，個々の人間における自覚的な自己発展を他人が助力するところに，教育の実現を見いだした点である．教育が単に自己教育ではない教育として成立するためには，そこに他者との関係がなければならず，そのため他者よりの助力という媒介が不可欠の条件となる．木村によれば，「教育とは実に自己発展がそれにも拘らず他人の助力の下に立ち，他人の助力が直ちにみずからを自己の発展に媒介するというような事態でなければならない」[33]．とすれば教育とはあくまで形成することにおいて自覚的に自己発展する二者間の弁証法的交渉の意味でなければならず，それは導くものと導かれるもののあいだにおける，自発性と受動性の相即的連関において初めて成立するということができる．環境との相即においてイデアを見るのはあくまで個的主体にほかならず，その意味で教育とは主体の自己形成に対する他の主体の助力であるにすぎない．

しかし教育が主体の自覚的自己形成への助力であるとしても，なぜ人間は自己の発展にとどまらず他の人間の自己発展にまで参与しなければならないのか．木村によれば，個体が自己を高め完全性の理念に向かおうとする努力は，「単に自己のための努力であるのではなく，人間性そのものの完成のための努力であり，歴史的＝社会的生命そのものの一層よき実現のため」でなければならないからである[34]．つまり主体を形成的主体として本来的に歴史的社会的存在とする彼の理論では，教育における形成もまた単に個的主体において完結した営みであるのではなく，同時に歴史的社会的な問題でなければならない．彼によれば，「個体は人間生命開発の超個人的課題を本来的に担っている」のであり，ここに人間存在における教

育の可能性と必然性が認められる[35].

以上の議論を踏まえて第三の特徴としたいのは，木村が教育をあくまで主体間の弁証法的連関構造として論じる点である．つまり彼は教育関係について，それが主体＝客体ではなく，主体＝主体の営みでなければならないことを重視し，個体間における直接的な働きかけを否定する．それでは教育はいったいどのようにして成立するのか．そこで重要な役割をもつのが媒介の働きであり，それは形成の所産としての教材である．

> 教育は本来主体が主体を教え育てるのであるとすれば，主体そのものが如何にして他の個々の主体に直接的に限定力を及ぼすことができるか．このことは不可能でなくてはならない．主体は一般に直接的に主体に働きかけることはできない．表現が主体間の交渉を媒介するのである．今の場合には，表現されたもの，作られたものとしての教材が主体間の教育的交渉を媒介するのである.[36]

それでは教材とはいかに形成され，どのようにして教育的交渉を媒介するのか．以下，木村教育学おける第三の特徴として彼の教材論を検討する．

3.3　媒介としての教材

木村によれば，教材とは「本来表現的自覚性を本性とする生命を教育的に高め上げるための客体的な媒介にほかならない」[37]．すなわち教材とは単に素材として主体に対するものではなく，主体に対し表現的に呼びかけて来る汝的外でなければならず，「最広義に於て原理的に伝統的なもの」でなければならない．しかし彼によれば，外としての歴史的環境がすべて直ちに教育的連関を成立させる教材であるのではなく，それが教育として成立する限り，導くものと導かれるもののあいだには何らかの教育的精神がなくてはならない．木村によれば「伝統的文化的環境は，そのままに於

てではなく，先ず以てそこから選び出されたものとして，次には更にそれが一定の構成にまで統一せられたものとして，そのとき初めて教材となる」のでなければならず[38]，その意味で教材を教材として成立させるのは，歴史的現在における主体の形成的意志にほかならない．

> 選択と構成がそこになされるということは，汝的外が直ちに教育されるものとしての主体を限定するのではなく，却って歴史的現在に於ける意図と批判とが伝統的文化的環境にさし向けられ，かかる意図と批判とに依って初めて汝的外を素材としてそこから教材の形成が生み出されるということを意味するのでなければならない．現在は然るに常にイデア的未来に結びついている．そうすれば単なる伝統的文化的環境がではなくして，創造的方向をもった歴史的現在の意志に依って再形成されたそれが，初めて具体的に教材を形造るのであるといわなければならない．[39]

つまり木村のいう教材とは，伝統的なる文化的環境に批判的に対峙する主体の限定において初めて成立し，ゆえに創造性を以て他の主体を限定する教育的連関の媒介となる．教育活動とはすなわち，教材の形成を媒介にした主体＝主体の弁証法的連関の，無限なる循環であるにほかならない．『表現愛』に展開する形成概念にみたように，主体と環境，内と外，伝統と創造のあいだには，無限に旋回し進展する相互の限定関係が成立し，その連関構造がすなわち歴史的に文化を形成する作用であるといわれた．主体が教材を形成し，さらにその教材を媒介として主体を形成するという無限に相互的な営みは，人間の歴史的発展性において絶えず繰り返され，その連関がすなわち不断に歴史を創造し行く歴史的形成作用であることは，あらためて言うまでもないだろう．木村によれば，「教育活動は，過去に無限の伝統を負い未来に無限の創造を望みつつ，前者を後者のうちに媒介的に止揚しながら，かくの如き伝統即創造，創造即伝統の動的現在の立場

から文化の根柢を主体的に育成するところにその特有なる文化的使命を有するのである」[40]．そして自ら「形成＝歴史形成」の実践において教材を構成し，その媒介を以て被教育者と直接に対峙する存在が，すなわち教育者であるにほかならない．

教材を形造ることが歴史の創造性として語られるように，木村によれば，歴史はただ現在における主体の批判的意識によってのみ発展し行くものである．教育活動の実践を担う教育者とは，「伝統の深き体得者であり現在の情勢のよき認識者であると同時に，それを超えて行く創造的精神のよき理解者」として，自らの「批判的精神を以て時代の自覚的尖端を行くもの」でなければならず，彼の実践は「批判的精神を以て教材を構成し，それを媒介として，発展して行く文化の主体的根柢である伸びて行く若き精神に向って形成的に働きかけるところ」にこそ成立するのでなければならない[41]．すなわち教師の実践は歴史的現実に対峙する「批判的精神」に裏づけられた，まさに教材であるのでなければならず，だからこそ木村は教育者に対し，現在の批判者であるに相応しい教養と知性，そして歴史の現状を否定する強き意志への一層の努力を要請する．イデアへの向上的努力を止まない教育者の実践が，被教育者としての主体を以て自らも歴史的主体として無限なる形成の努力へと向かわせるところに，教育的交渉としての弁証法的連関構造は成立するのである．そのことは次のようにまとめられる．

> 教育が真にその本質的な任務を果たすということは，未熟なる人々を歴史的生命の真実の現在の形成的自覚点にまで助力形成することであって，このことは単なる伝統へ向っての教育でもなく，また単なる現在へ向っての教育でもあり得ないのである．伝統に関しては，単に伝統的成態をいわば外から見て単に知的に把握するというような浅い理解にとどめないで，成態の根柢にあってこれを産み出した形成的表現力としての伝統的精神そのものを追体験

> 的にみずからの主体の内部に於て体得せしめると同時に，また現在に関しては，そこに於て現にイデアが形成的に見られつつある過程から遊離しないで実践的に身を以てそれに参与すべきことの自覚と力量とを涵養せしめ，而もそれにとどまらないで，ノエマ的現在への適応を超えて更に高くイデア的未来への創造力を目醒めしめ育成すること，――そこに初めて教師の使命の具体的遂行がある.[42)]

以上が木村の教育思想の骨子である．本節ではその特徴を，第一に人間の陶冶性がすなわち形成への努力であること，第二に，教育が，主体の自己形成に対する他の主体の助力という主体同士の相互的連関において成立すること，そして第三に，教材をその連関構造の媒介として，歴史的現実に対する批判的精神を以てなされるその形成に，教育的精神の実現を認めたことの三点に見いだした.

いまいちど強調したいのは，その教育思想においてやはり歴史との対峙が重要な意味をもたされる点である．木村の議論では，人間はすべて内と外の相即においてイデアを見る形成的主体であり，『表現愛』では，個的主体の行為としての形成が，すなわち伝統と創造の自覚的媒介点として，同時に歴史的実在における歴史形成の営みであることが論じられる．主体は必然的に歴史的実在の内において在る歴史的形成的存在でなければならず，そのゆえに木村は，主体の形成がすなわち歴史的実在の形成的自覚点であるという．主体が歴史形成を担うものであるとするならば，形成的主体の育成を使命とする教育活動は，その意味で「天地の化育を賛ける業」であるにほかならない．教材論において，単に伝統や現在の固守ではない，伝統即創造，創造即伝統という歴史的現在の動的な把握と批判が重視されたのもそのゆえであろう．戦中の木村が教育を国民教育の問題として論じたことは冒頭で述べたが，教育をまさに「天地の化育」として理論化した木村の議論が，国家を担い歴史を創造する「国民」教育の問題に従事

したことも，ここに必然の問題として認められるのでなければならない．というのも，木村は「表現愛の哲学」における人類文化の立場を「抽象的把握に過ぎない」としたうえで，個人と人類をつなぐ媒介としての特殊を「種」としての「国民」において具体化するからである[43]．そのため表現的主体をすなわち国民主体として具体化する木村の教育思想は，「世界史の哲学」派が展開したと同様，「世界史」の問題をその論の基盤とし，その形成に努力する「世界史的国民」形成の教育論を展開するのである[44]．

3.4　無の思想という問題

以上の議論では，木村の教育思想が歴史的現在と対峙する主体の論理というべき性格を有していた旨を明らかにしたが，しかし彼の思索が立脚するのは，やはり西田哲学における「〈無〉の思想」であり，そのため木村のいう「歴史」という概念自体がある種の問題性を抱えていることもまた指摘しておかなければならない．すなわち主体の形成が歴史的現在における伝統と創造の自覚的媒介点であるとしても，その契機としての「歴史的現実」との対峙がいったい何において為されるのかという，その根源的な拠りどころに関する問題が，彼の哲学に結局論じられないことである．木村においてイデアは形成的イデアとして何らかの実体であるのではなく，歴史的現在において主体が行ずるものとして，畢竟「無」であるのでなければならなかった．イデアの実現を主体の「形成」それ自体とする木村の論理では，普遍絶対的なイデアに拘束されないという意味で主体に対し無限の可能性をひらくものの，実はかえって無秩序として主体に狂気をも許すものとなりかねない．具体的な教材形成に関しては，歴史的現実に対する主体の批判的精神がその基軸におかれたが，しかし形成において「無」あるいは「空」を行ずる主体にとって「歴史的現実」とは何であり，主体はいかにしてそれを批判することができるのだろうか．

そして同理論構造にともなう問題がもっともよくあらわれたのが，これ

までも「戦争協力」として批判されてきた，戦中の「国民教育」論であるにほかならない．本稿で論じる紙幅はもたないが，戦中に展開する国民教育論では，主体を形成に導くその根源なるものがまさに「国体」観念において認められ，そのため木村の教育論は多分に国体主義的な色合いを以て展開される．そこでは対峙すべき「歴史的現実」がまさに「一国の根源的な原理としての我国の精神」たる「国体」を通して認められ，世界史の形成は畢竟，「一切の国民活動の根源」でありまた「その発展の創造的源泉」である「国体」の自覚的自己形成として語られるのである[45]．その意味でもやはり木村の思索全体を通しての「歴史」ないしは「歴史的現実」の問題は，厳密に検討されなければならないと思われる．

村瀬は木村の国民教育論について，それが「表現愛の哲学」に対する「障害」であったと明言するが[46]，しかし本稿の立場からすれば，国民教育論は木村の思索において障害であるよりも，むしろ歴史的現実を射程とした「表現愛の哲学」の具体化であり，国体主義に傾いたその問題の萌芽は，かえって表現愛の哲学のうちに認めることができると考える．イデアを「無」として動的に論じようとする限り，それは常に何らかの観念を絶対化しようとする危険を避けられないものとする．現在の教育学における木村の再評価は，彼の思索に「二つの方向」を準備することで，こうした問題に目を向けてこなかったといわなければならない．「国民」を論じた彼の教育思想が，結果的に「戦争の片棒を担いだ」としても，あくまで歴史形成の立場に立ちながら，主体の形成を「国民」の形成として具体化した木村の視座は看過されるべきではないだろう．これまでは「表現愛の哲学」に対する戦中の議論が，彼の本意であったかどうかが問われてきたが，重要なのは，木村が「国民」から教育を考えたのではなく，あくまで主体における形成の問題として歴史を語り，その具体化として国民の問題に到達したという思考のプロセスである．本稿で明らかにしたこの思索過程を前提にすることではじめて，彼の国民教育論の内実が明らかになると

ともに，そこで問題とすべき「歴史」に関する議論を，西田哲学をはじめ「世界史の哲学」派との関連で考察することが可能になると思われる．木村における「歴史」の問題を念頭に，彼の「世界史的国民」形成論をさらに詳しく検討し，木村教育学の今日的な意義と限界を明確にするとともに，イデアを動的に把握しようとする「〈無〉の思想」が抱える根本的な問題の闡明が試みられなければならない．

4　おわりに

以上本稿は，木村の思索の中心概念である「形成」概念を，その歴史形成としての性格に着眼してとらえ直すことで，形成的主体の論理を歴史形成の論理として展開する可能性を提示し，さらに同立場を継承した彼の教育論が，歴史的主体形成の営みとして歴史の問題をその主要な関心に据えている旨を明らかにした．木村が教育を「天地の化育を賛ける業」としたことは先行研究においても言及されてきたが，それはそもそも主体における形成が歴史形成的であることに依るのであり，教材論に語られたように，歴史的現在に対する主体の批判的精神がすなわち教育的精神の実現として，それは常に歴史的現実と対峙することにおいてイデアを見る歴史的主体の問題として理論化される．つまり木村において教育とは，普遍的超越的なるイデアを実現する意味で陶冶なのではなく，歴史的なる形成において自己を陶冶するその過程をこそ意味するのである．そこで強調されるのは，表現的世界における伝統と創造の弁証法的連関であり，その相即において見られるイデアの歴史性であった．歴史性とはすなわち不断の動性である．本論で指摘したように，そのことは主体に対し歴史の創造に参与する途をひらくとともに，一方で「無」なる性格を根源とする同理論では，すべてがただ動的な相互限定において規定される点で問題を孕むものでもあった．歴史的現実に対する批判的精神を強調したはずの木村の思想は，かえって「歴史的現実」を「国体」観念においてとらえようとする極

めて抽象的な議論に向かっていく．

主体における形成が同時に歴史の形成であるとしても，主体が形成においてまさに現在作りつつある歴史を語ることは，果たして可能なのだろうか．木村の議論に従えば，主体の内なる思索は，言語として表現され理論として立ち上げられた瞬間にすでに過去のものとなり，むしろ主体に対して新たなる形成を促す外として立ち現れることになる．歴史がその無限の繰り返しであるとすれば，いったいわれわれが対峙すべき「歴史的現実」とはいずこに見いだし得るのだろうか．木村の思索における歴史の問題をさらに立ち入って検証するとともに，やはり同論を展開した木村自身がいかに歴史的現実に対峙したかという問題が同時に問われなければならない．西田をはじめ「世界史の哲学」派がそうであったように，同じく京都学派のひとりとして戦中も執筆をつづけた木村にとってもまた，世界史は逼迫した問題であったはずである．歴史哲学の問題を架橋として京都学派との思想的関連を再検討することで，木村が主体を「国民」として具体化しなければならなかった，その議論にともなう問題がはじめて明らかになると思われる．

また木村が教育を「天地の化育を賛ける業」としたように，教育という営みが歴史の形成においてあまりに重大な意味をもつことは，これまでの歴史的事実が証明するところであろう．修身科に象徴される戦前日本の国家主義教育が，いわゆる「総力戦」体制を構築する一助となったことは，戦後教育学により絶えず批判・反省され続けてきた．世界史が複雑化し，容易な将来の見通しを許さない今日，教育がいかに「歴史的現実」と向き合うべきかという問題を，慎重に検討する必要があるのではないか．木村が強調したように，教育は個々の主体における自己形成の連鎖である同時に，未来の歴史を形成するまさに「業」でなければならない．大戦という非常時にあって，木村はこのあまりに壮大な歴史の問題といかに対峙したのか．本稿で提起した歴史における「空」あるいは「無」の問題を中心

に，国民教育論を含めた思索の全体像について，さらなる研究を進めたい．

註

1) 大西正倫「木村素衛―実践における救いの教育人間学」皇紀夫・矢野智司編『日本の教育人間学』玉川大学出版部，1999年，14-15頁．

2) 木村の思索に「超越」や「生成」へのポテンシャルを読み込もうとする再評価の動向について，それが「ポストモダン」を経験した教育学における「戦後教育学」批判のひとつであったことについては，山田真由美「戦後教育学における「京都学派」：政治的批判と哲学的再評価のあいだ」『人間と社会の探究』慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要，第80号，2015年．

3) 代表的なのは，大西正倫『表現的生命の教育哲学―木村素衛の教育思想』昭和堂，2011年をはじめ，木村の教育思想を「美的人間形成論」として再理論化しようとする西村拓生の一連の研究（西村拓生「京都学派における美と教育―木村素衛の表現論に即して」平成14-16年度科学研究費補助金・基盤研究B（1）研究経過報告書「美的なもの」の教育的影響に関する理論的・文化比較的研究，2005年，同「京都学派と美的人間形成論―木村素衛は如何にシラーを読んだのか」『奈良女子大学文学部研究教育年報』第5号，2008年，同「現場というテクスト，テクストという現場」『教育哲学研究』第111号，2015年）である．また田中毎実は，木村を京都学派の教育哲学者として，その思索を西田幾多郎・木村素衛・森昭という「京都学派教育学」の系譜に位置づけ，同思想を基軸に「臨床的人間形成論」という新たな語りの構築を試みる（田中毎実『臨床的人間形成論の構築』東信堂，2012年）．

4) 森田伸子「木村素衛における政治と教育―京都学派の身体論を問い直す」日本女子大学教育学科の会『人間研究』第51号，2015年．

5) 同上，34頁．

6) 矢野智司「人間学―京都学派人間学と教育学の失われた環を求めて」森田尚人・森田伸子編『教育思想史で読む現代教育』勁草書房，2013年．

7) 田中前掲書（註3）．

8) 木村の思想を具体的に西田哲学との関連で論じたものとして，美学の側面からは，たとえば岩城見一の「解説」（木村素衛『美のプラクシス』燈影舎，2000年），教育学の側面からは，矢野智司「生成と発達を実現するメディアとしての身体―西田幾多郎の歴史的身体の概念を手がかりに」（田中毎実編『教育人間学―臨床と超越』東京大学出版会，2012年）がある．

[9]「世界史の哲学」派とは，狭義には，雑誌『中央公論』の企画として，戦中におこなわれた一連の座談会「世界史的立場と日本」（高坂正顕ほか『世界史的立場と日本』中央公論，1943 年）に参加した 4 名の哲学者（高坂正顕，高山岩男，西谷啓治，鈴木成高）を指していわれる呼称である．

[10] 木村と「世界史の哲学」派との関連に対する消極的評価について，最も顕著なのは，村瀬裕也の場合である．村瀬は，戦中の木村が「世界史的国民」教育論を展開した事実を認めながらも，戦中の木村が綴った日記の言葉を手掛かりに，それがあくまで「国家主義的潮流に妥協」した苦渋の結果であったことを強調し，両者の絶対的な断絶を主張する（村瀬裕也『木村素衛の哲学―美と教養への啓示』こぶし書房，2001 年）．一方，大西は上の村瀬の見解を批判し，「「世界史の哲学」派から木村素衛を除外できるとは考えられない」（大西前掲書 2011 年（註 3），8 頁）と述べるが，しかし大西の場合も国民教育論の内容と位置づけに関する積極的な検討・評価はなされていない．国民教育論に関する大西の見解に対して，森田伸子は，「戦後教育学を長い間支配してきた，国民対国家，国家＝悪という図式」（森田前掲（註 4），33 頁）を読み取ったうえで，その問題性を指摘する．森田は木村を田辺哲学との連続においてとらえる点で従来の研究と一線を画するが，しかし京都学派との関連については言及がなされていない．

[11] 木村素衛『表現愛』こぶし書房，1997（1939）年，9–10 頁．

[12] 西田幾多郎「教育学について」1933 年『西田幾多郎全集第 12 巻』岩波書店，93 頁．

[13] 大西前掲 2011 年，278–279 頁，298 頁．

[14] 矢野智司は，西田の論文「論理と生命」（1936 年）に展開する「歴史的身体」の概念を検討し，その『表現愛』（1939 年）における一定の展開を認めるが，しかし西田の「歴史的身体」に関する理論が，戦中に展開する木村の教育学において，「学習理論としても教育理論としても発展することはなかった」（矢野前掲 2012 年（註 8），245 頁）として，その連関を消極的に評価している．

[15] 第一論文「身体と精神」では「表現＝形成」概念において表現的世界の弁証法的構造が明らかにされるが，第二論文「表現愛の構造」で語られるのは，第一論文で明らかにした表現的世界をエロス的世界として，さらにそれと弁証法的関係を有するアガペの世界についてである．本稿は主体における「形成」の問題を明らかにするため，その論述を表現的世界の問題に限定し，アガペ的愛の世界に関する検討は別稿での課題とする．

[16] 木村前掲 1997 年（註 11），21–23 頁．

[17] 同上，20 頁．

[18] 同上，24頁.
[19] 同上，25頁.
[20] 同上，26–27頁.
[21] 同上，27頁.
[22] 同上.
[23] 同上，28頁.
[24] 同上，29頁.
[25] 同上，57頁.
[26] 同上，58頁.
[27] 木村素衛「文化の本質と教育の本質」『形成的自覚』岩波書店，1941年，51頁.
[28] 木村素衛『国家に於ける文化と教育』岩波書店，1946年，88頁．なお引用に際しては，旧字体をすべて新字体にあらためた.
[29] 同上，79頁.
[30] 木村は完全性への努力を人間の使命とした点でフィヒテの論に従うが，しかしフィヒテが同理念を超越的なる神に認めたに対し，表現愛の立場に立つ木村がそれをあくまで超越即内在なる形成的イデアとしたことは注意しておかなければならない．木村のフィヒテ研究を検証することは本稿の課題でないが，フィヒテの論に対し木村が人間を形成的主体として，その歴史的社会的なる本質を強調したことをここに強調しておきたい．なおドイツ観念論研究との関連で表現愛の哲学を位置づけようとした研究に，小田部胤久『木村素衛―「表現愛」の美学』講談社，2010年がある.
[31] 木村前掲書1946年（註28），80頁.
[32] 同上，87頁.
[33] 同上，91頁.
[34] 同上，88頁.
[35] 同上.
[36] 同上，124–125頁.
[37] 同上，125頁.
[38] 同上，126頁.
[39] 同上.
[40] 同上，127頁.
[41] 同上，129–130頁.
[42] 同上，129頁.
[43]「個人は直接人類の一員であるのではなく，却って両者の間にはさまざまな特

殊が介在し，それらを通して個人は初めて人類につながるのである．だから個人を直ちに人類につながるものとして，個と類との間に介在する種を看過し或はその重要性を見失って軽視するならば，それは主体の抽象的把握に過ぎないこととならなければならない．…我々は人類の一員であるよりも，先ず以て具体的に国民の一員である．」（同上，208-209 頁）．

44) 本論で述べたように，戦中の木村が「世界史の哲学」派と同様の概念を以て「世界史的国民」教育を論じたことは先行研究にも認められるが（註 10），しかし彼の「世界史」の概念が「世界史の哲学」派と同様の意味で用いられたかどうかについては，両者の著書に基づいた具体的な検証が必要である．

45) 木村前掲書，1946 年，298-299 頁．しかし注意しなければならないのは，ここで用いられる「国体」の概念が，あくまで「永遠にして最高の規範」（同）なる超越論的理念として論じられることである．つまり「国体」は，歴史の現在にあらわれる現実を包越し，それを根源より成立させる絶対的な概念であっても，歴史的現実そのものであるのではない．同理論構造を理解するためには，木村が「表現愛の哲学」で理論化しようとしたエロス的世界に対してのアガペ的救済の論理を検討しなければならず，そのことについては今後の課題としたい．

46) 村瀬前掲書（註 10），45 頁．